

きつ音 支援の場広がる

写真は日本経済新聞 12 月 18 日夕刊「ライフサポート」。リードから一思うように言葉が出てこず、職場や学校などでコミュニケーションがうまくいかずに悩みがちなきつ音を持つ人への支援の場が広がりつつある。症状との向き合い方などを学ぶ大人向け教室が毎週開かれているほか、きつ音のある子どもを指導する「ことばの教室」の設置数は全国で 5 千校以上にのぼる。必ずしも「治す」ではなく、「上手に付き合う」ための支援も求められている。

「授業での発表前日、不安で心臓がバクバクする。どうすれば普通に話せるだろう」「それを友達から指摘されたの？」一。12 月上旬、大阪市内で開かれた「大阪きつ音教室」でのやり取り。きつ音に悩む大学生を含めた大人 14 人が集まり、お互いが直面している課題を話し合う。この日は図を用いて、自分自身がどの程度きつ音を気にしているかや、周囲の人たちからどれくらい理解されているかなどを確認した。

教室は、NPO 法人の大阪スタタリングプロジェクト（大阪府藤井寺市）が毎週金曜日を開いている。同法人はきつ音（スタタリング）の当事者でつくる団体で、「きつ音を治すことよりも上手に付き合うこと」を柱に据え、きつ音への向き合い方などメンタルヘルスケア教育を重視している。

私がこの記事に注目したのは、前にもレポートしたように、幼ない頃から高校生あたりまで、きつ音（昔はどもりと呼んでいたが）に悩んでいたからだ。いつ頃、きつ音になったか記憶にないが、今でも忘れられない思い出がある。近所の仲良しだった友だちの母親が、私と遊ぶと子どもに「どもりがうつる」と話していたのを聞いたことだ。押入れに隠れて泣いた。学校でどもりの真似をされ、からかわれたことも忘れられない。国語の朗読の順番が回ってくると、心臓がバクバクして、教室から飛び出したくなった。英語ではスラスラと英文を読むことができた。やはり親から、どもりを注意されたのは辛かった。でも高校の後半頃から、きつ音をあまり気にしなくなった。出にくい言葉を言い換え、抑揚をつけたりして、きつ音を自分で「操作」できるようになった。大学で学生運動に参加するようになり、デモ行進の先頭でシュプレヒコール役をつとめることも。幼い頃から、人を笑わせることが好きで（これが現の寒いダジャレに？）、教室で落語のようなことを披露したことも、吃音からの脱却につながったかもしれない。自分なりに、きつ音に上手に付き合ってきたわけだ。

35 年にわたる教員生活では、きつ音をほとんど意識しなかった。でも今も講演の前などにはキンチョーして、出だしは意識する。それを乗り越えれば、あとはスイスイと話を続ける。寒いダジャレを交えながら。

(2019 年 12 月 21 日)

